

地域の豚ふんで混合肥料

全農いばらき開発

JA全農いばらきは、県内の豚ふん堆肥を使った園芸品向けの混合堆肥複合肥料を開発した。豚ふん堆肥を35%使用し、代替可能な化学肥料よりの割合で、地域の資源を活用して高騰する肥料費を抑制しつつ、環境に配慮した生産にも貢献する。秋肥向けに、7月から販売を始める。

JA全農いばらき 予定だ。混合堆肥複合肥料は、化学肥料と堆肥を混ぜて製造する。耕畜連携の実現に向けて朝日アグリアと昨年7月から検討を開始。「サステナミライZ」として12月に完成した。銘柄「ローズポーク」の生産者の豚ふん堆肥を使う。

肥料成分は窒素12

化学肥料より3割安



新たな混合堆肥複合肥料を手にする全農いばらきの鴨川本部長(左)ら
(茨城県茨城町で)

%、リン酸6%、カリ4%を保証。化学肥料より成分が溶脱しにくいことなどから、リン酸やカリを抑えた。長さ5mm程度の円柱状のペレットで、化学肥料と同様にプロードキャスターなどでまき、散布の手間も減らせる。

全農いばらきは混合堆肥複合肥料の取扱量が、全農都府県本部の中で最多。2012年に製造・販売が許可されて以降、土づくりや肥料費の低減に向けて普及を進めた。22年度の実績は12月末までに1610ト。今後さらに普及を進め、23年度は「サステナミライZ I」を含む混合堆肥複合肥料の取り扱いを4500トまで増やす計画だ。

全農いばらきの鴨川隆計本部長は「消費者の理解を得つつ、地域を巻き込み環境に配慮した農業に取り組みでいきたい」と話す。